

会派視察報告書

会派名： 至誠クラブ

参加者：山田慶勝 筒井 登 神谷雅章
磯部雅弘 藤井基夫 黒辺一彦

視察先：令和2年2月 5日 東京都日野市
2月 6日 国会
2月 7日 幕張メッセ

【第1日目】

令和2年2月5日（水） 14:00～16:00

東京都日野市役所

「職員の意識改革にかかる取り組みについて」

～「絶対に人に見せてはいけない職員手帳」活用など～

1. 日野市の概要

東京都の島嶼部を除く地域のほぼ中央に位置し、市域の西側に広がる日野台地は関東ローム層の堆積した土地で、西隣の八王子市へと続いている。北から東にかけては隣接する昭島、立川、国立、府中の各市との境界を多摩川が流れ、市域の南部に広がる多摩丘陵（七生丘陵）の北側を西から流れてきた浅川と南東部で合流している。

かつては「日野宿」が設置されており、甲州街道の農業を中心とした宿場町として繁栄した。新選組の副長として活躍した土方歳三や六番組隊長の井上源三郎の出身地である。

また、市内最大の大企業である国内トラック・バス製造業界最大手の日野自動車の企業城下町でもある。

昭和に入ってからは大規模企業や大規模団地が進出しているものの、河川や丘陵地が多く、国土交通省より「水の郷百選」に認定されるなど自然も多い。また、多摩地区としては水田や野菜畑などの農地が占める割合が高く、都市農業の代表的な都市として紹介されることが多い。



2. 調査事項の概要

本市ではSUUMO 住みたいまちランキング：2017年関東版→100位圏外。

日野市認知度等調査（2017年8月実施・10月公表）でも、住む場所として選ばれない理由の1位「よく知らない・特徴が分からない・情報がない」→全体の19.5%という結果を受けた。

この課題を解決していくために、市職員による「日野市の魅力発見職員プロジェクトチーム」を結成。市の魅力を発信するためには、市の職員一人ひとりが“働くことにワクワクしている”ことが重要だと考え、職員一人ひとりが“ワクワクしながら”使えるインナーツールの企画・検討を重ね「絶対に人に見せてはいけない職員手帳」を完成させた。

これにより市の認知度向上と職員のモチベーション向上に与える効果、課題を西尾市政、市議会の活性化に繋げられるように、手法や考え方をご教授いただいた。

「絶対に人に見せてはいけない職員手帳」とは？
日野市の魅力を伝えるための“全力で攻める”手帳が誕生

【日野市ホームページ参照】

<http://www.city.hino.lg.jp/shisei/profile/gaiyo/shokuintecho.html>

前代未聞！

日野市発の「絶対に人に見せてはいけない職員手帳」

2019年2月、おもむろに配布されたものを見て、職員たちはいつせいに目を丸くした。ひとりひとりに手渡された”手帳”の表紙には、「絶対に人に見せてはいけない職員手帳」と銘打たれていたからだ。

これは、日野市広報担当やシティセールス推進課、都市計画課、学校課などの職員によるプロジェクトチーム、つまり日野市役所の職員が、職員のために作り上げた手帳である。

通常は、自治体が手帳を制作することはあっても、中身は街の基本情報や服務規程などが記載された事務的なものだ。

しかし、この手帳は違う。とおりにっぺんのことは書かれていない。ページをめくると、日野市の魅力や市職員の仕事内容などがQ&A形式でイラストとともに紹介されている。すべて、市の職員約3000人を対象に実施したアンケートの回答結果によるものだ。といっても、巷の広報誌で見られるような紋切り型の答えはひとつとしてない。

まず、最初に紹介されるのが、「日野市ってどこ？」と訊かれて「立川と八王子の間、かな」と答える、日野市民の“定番自虐ネタ”だ。「日野市は住んでみると良いところがたくさんあるすばらしい街」だと実感している一方で、「市外の人たちにはイマイチ知られていない地味な街」という後ろ向きな自己評価がそこにはある。それをこの手帳は「東京のど真ん中」、「横綱のごとく、デンと構えている」と表するばかりか、「太刀持ちは八王子くんに、露払い立川くんに任せています」と余裕たっぷりに構えてみせる。全編がこの調子で、ユーモラスなQ&Aを読むうちに、日野市の魅力とそこで働く職員の想いを伝える仕組みになっているのだ。

3. 主な質疑・答弁

① プロジェクトチームの構成メンバーと決定方法はどのようなか。

- ・企画部長、企画部市長公室3名、産業スポーツ部シティセールス推進課2名、教育庶務課1名、学校課1名、まちづくり部都市計画課1名、庶務部職員課1名、総務課1名…計11名。
- ・選定は希望者募集とともに企画部長、広報担当で選定した。



② 製作費の内訳はどのようなか。

- ・業務委託料450万円（委託料、印刷料 3,000部）

③ 職員への周知、使用方法、また市民や議会の反応はどのようなか。

- ・配布前に庁講説明。市長からビデオレター付きで庁舎内掲示板へ掲示。使用方法は手帳内に記載しているものを確認することとした。
- ・市民の反応としては「よく面白いものを作った」「市民全員に配布してほしい」「日野市に住んでいるのが嫌になった…」など様々な意見をいただいた。
- ・議会からは「職員の努力」「まちづくりの推進に活用してほしい」などの意見があった。

④ 事業の成果（メリット・デメリット）の考え方について（費用対効果、職員・市民の意識向上への貢献度など）

- ・多数メディア（新聞、テレビ、ラジオ、雑誌など）の展開、書籍化（累計11,000部）

- ・職員採用における積極的活用、教育基本構想との協調（対話の一助になっている）
- ・デメリットとして税金を他に使ってほしいという声がある。

⑤ 現状の課題、今後の目標について

- ・（手帳に限らず）次につながるものが当初からの目標。挑戦的になることができれば良いと考える。

【所見・西尾市政への反映に向けた課題】

所見 1

日野市役所に伺い、主に「絶対に人に見せてはいけない職員手帳」について説明をしていただいた。この職員手帳を制作に至る経緯が、SUUMO 住みたい街ランキング:2017 関東版において、100 位以内に入っていなかったことに危機感を感じ「日野の魅力発見職員プロジェクトチーム」が結成されるきっかけとなった。



このプロジェクトチームの役割は、日野市の知名度を向上させることや市の魅力を発信することが最大の役割であり、それに向け「絶対に人に見せてはいけない職員手帳」を制作することとなった。

手帳の内容は、西尾市にもある「市政概要」のようなものである。しかしながら、決定的に違うのはシンプルで分かりやすく、イラストも多い。思わず手に取って読みたくなると感じた。この手帳を職員が読んで、すぐに意識改革につながると思わないが、少なくとも日野市の職員は、日野市の魅力、情報を無意識に発信できるようになるのではないかと感じた。それが意識改革につながるかもしれない。

所見 2

住みたい行政市区ランキング（関東版）で 100 位に入っていないことに日野市の職員が愕然とした。人口が 18.5 万人いるのに対外的に市の PR ができていない。これらのことから、人口減少時代となるこれらに向けて不安を感じ、危機感を打破するため部課の枠を超えたメンバーによるプロジェクトチームが結成され、課題解決に向けた取り組みがスタートした。

職員手帳の内容はともかく危機感からの脱却を目指し、同じ方向を向いての取り組みが個人の力では考えられない大きな力となり、職員手帳という成果を生み出したと思う。全職員に配布したそうだが、市民を巻き込んだ取り組みにもっていけなかったことが残念である。しかし、出版社の協力により、市販されることとなり、多くの市民の目に触れることとなった。比較的好評であり、職員にとって働く糧となったそう。正直まだ結果が出ていないが、自分たちの働くまちの魅力を考え、自分たちで誇りをもって発信していくこと。これからの時代においてとても重要であると学んだ。

本市においても、職員が常に西尾市の魅力を考え、西尾市のまちについて自信をもってアピールする必要があり、それを実践することにより西尾市の未来を照らす大きな力となる。また職員に対するモチベーションアップこそが、市全体に及ぼす大きな影響力を秘めていることを学び、担当課に案内し、活かしていくように進言していきたい。

所見3

この手帳を職員自らが著したことについて、二つの見方ができると思う。

つまり、市行政に対して職員として著しく不平不満を感じているのか、あるいは市長部局と一般職員との間が円満のうちに推移しているかのどちらかであろうと考えた。

結果において、すべての考えが忌憚なく言い切れているとは思えず、消化不足の感は否めなかった。

【第2日目】

令和2年2月6日（木） 10:00~14:00 国会議事堂

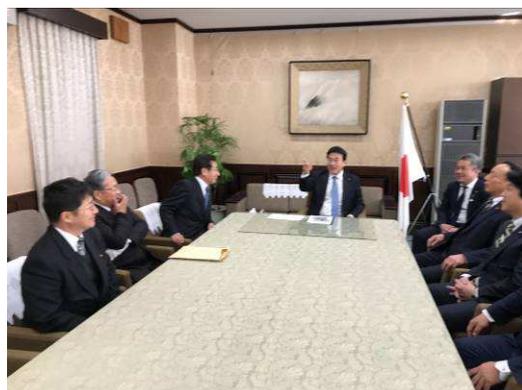
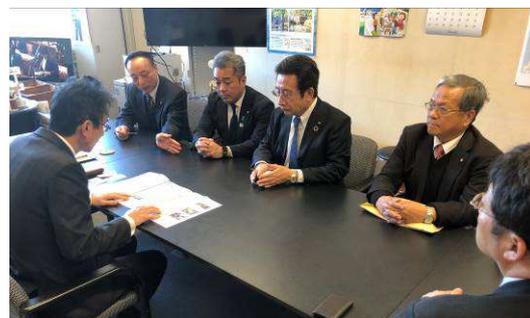
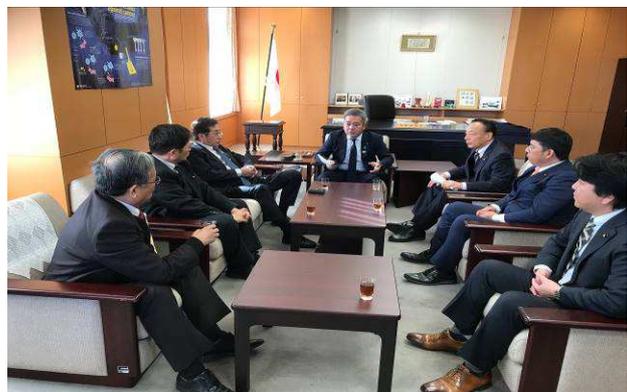
国会関係部署へ要望書提出

国土交通大臣政務官 佐々木紀衆議院議員、池田豊人道路局長、五道仁実水管理・国土保全局長と面会

自民党副幹事長 酒井庸行参議院議員と面会

財務省 財務副大臣 藤川政人参議院議員と面会

文部科学省 文部科学大臣政務官 青山周平衆議院議員と面会



【第3日目】

令和2年2月7日(金) 10:00~16:00

千葉県千葉市 幕張メッセ 「地方創生 EXPO」

以下の特別セミナーに参加したほか、出展ブースにて説明を受けた

10:00~10:45 「第2期地方創生総合戦略(地方版)の課題」

(一財)地域活性化センター 理事長 椎川 忍

12:00~12:45 「地方創生デジタルファースト宣言のすすめ」

内閣府クールジャパン地域プロデューサー/観光庁アドバイザー/リーボードメンバー

陳内 裕樹

○地方創生 EXPO の概要 <https://www.m-messe.co.jp/event/detail/6097>

イベント名

第3回 地方創生 EXPO

内容

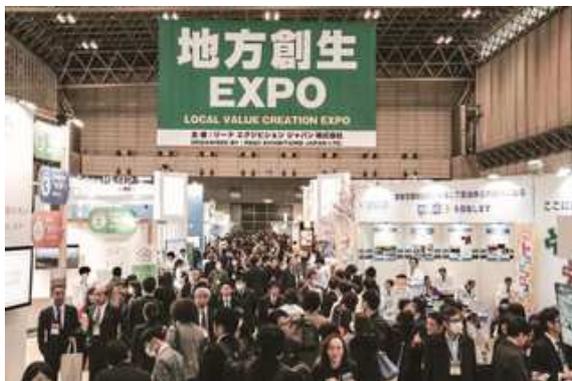
観光振興、インバウンド促進、移住・定住促進、自治体の ICT 利活用促進、地域経済活性化、人手不足解消のソリューション、地域の健康促進など、地方創生の推進を支えるあらゆるサービスが出展

期間

2020年2月5日(水)~2020年2月7日(金)

開催時間

10:00~18:00 最終日のみ 17:00 終了



【所見・西尾市政への反映に向けた課題】

所見 1

会場には、地方創生関連予算をより有効的に使うための計画や企画を手助けする、観光・集客サービスの支援、住みたくなる街づくりのためサービス、福祉・医療サービスなどたくさんのブースがあり、一つ一つ詳細な説明は受けることができなかったが、興味深い事業が多く見受けられた。

今回、「デジタルファースト」についてのセミナーを受講させていただいた。特に印象に残ったことは、たくさんの自治体が次々と「デジタルファースト宣言」を掲げていて、当市のPRなどの施策が施行され、成果が如実に表れていることだ。西尾市が取り残されないように調査、研究が必要だと強く感じた。

所見 2

「1分の動画はウェブページ3, 600枚分、地方の魅力は動画で」

衝撃的なお話で今までの考え方を大きく変えなければならない。

講義の内容をより詳しく語れば、観光を伝える戦略を考えていくなれば、予算の使い方を大きくシフトしなければいけない。いまだにパンフレットに予算を使っている日本はおかしい。ちなみに日本ではデジタル予算はまだまだ少ない5%程度。韓国30%、米国50%、ブラジル60%、ドイツに至ってはパンフレットはすべてオンライン化だそうである。時代が変わっていることに気づいていないのか。伝わっていないし、届いていない。ほんとうに効果が上がる行政手段を考えるべきであり、政策の基本的な枠組みを証拠に基づいていくべきである。そのための伝える戦略の予算の基本は次のようである。

(政策) 3 : (伝達) 6 : (検証) 1 (サーロインの法則)

持続可能な観光を促進するには、イノベーションとデジタル形成が重要である。実例を多く見せていただいたが、確かにパンフレットでは伝わりにくいことが瞬時に世界へと発信されている。しかも、しっかり届く、はっきり見える、ワクワクが広がる、そして何よりも行かれた観光客がSNSで味方となって応援してくれる。これでは格差は広がる一方である。

講演を聞き、先進地の取り組みに感動するとともに勉強不足である自らを戒め、Society 5.0時代にふさわしい仕組みづくりを考え、西尾市に活かされるようにアピールしていきたい。

所見 3

少し前には幕張メッセなどは、海岸沿いにある一寒村くらいに思っていたが、東京から幕張につくまでに私の印象は捨て去られていた。

まず、関東圏のポテンシャルの強さに驚かされた。

つまり、穿った見方と言われそうだが、いい加減な企画であったとしても、どこでも人が集まり、どこでも成功してしまうのではないかと感じたことである。

会場では、最先端の機器やソフト面での情報やら様々の面で目を見張るべき情報が多すぎて、今度訪問するときには焦点を絞って視察をしなければならないと思った。

とにかく、毎年開催されている企画のようだが、毎年行くべき価値のある企画だと思った。

収支報告

項目	支出金額	備考
調査研究費	350,750円	旅 費 346,700円 手土産代 4,050円 (送料1,050円含む)
計	350,750円	